

中国における日本語教育の目的と目的実現のために —「特色ある日本語学科建设」を例に—

于 日 平

The Purpose of Japanese Teaching and How to Realize the Purpose in China:

From the New Characteristic Program in the BFS

YU Riping

中国の大学日语教育目的，最初主要是培养沟通交流的翻译人才。随着世界的变化和中国社会的发展，日语的教育目的扩大为不仅培养翻译人才，还要培养推进中日文化交流的负责人，以及某个领域的日本问题专家和中日对比研究者。为了完成这一教育目标，现行的大学日语教育体制在课程设置和安排上，在日语专业教学时间的分配上，在各课程的教学计划实施以及课程之间的互相配合上，都存在很多需要解决的问题。北京外国语大学日语系从2008年承担了教育部的课题研究“有特色的日语学科建设”，以制定“体系化的日语专业教学总体规划”为核心内容，具体进行了1)各课程的纵向教学目标和教学计划的制定；2)各课程之间的横向的互动・互补关系的确立、的研究。本研究的主要目的是，为培养出中国社会需要的日语专业人才，提出一个行之有效的4年总体规划草案。

1. 外国語教育の目的と教育目標

中国における外国語教育は、明確な教育目的を持って進められており、そして、時代の変化や社会的必要に応じてその教育目標の重点も変わり、それに合わせて具体的な教育方針や教育カリキュラムの編成と授業科目

の設置、さらに教科書の選択や教授法の改革などが実施されている。ここでは、外国語専攻の教育を中心に、教育目的と目標について簡単に紹介したい。

1.1. 外国語教育の目的について

初期の外国語教育は外国との交流や外国の優れた文化の紹介と吸収などの必要に迫られて行われたものであった。その時の教育目的は、主に外国語の分かる人を育てることにあり、交流の仲介役をしてもらったり、外国の優れた文化や思想、経済や社会システムを紹介して取り入れたりする架け橋的な役割を果たす人材を育成することであった。したがって、外国語が分かり、外国との交流や外国文化の理解や紹介の役割を果たすことができれば、目的を達成したと認められていた。ところが、時代が変わり、社会的必要が変わるに従って、外国語教育は架け橋的な人材を育てるだけでなく、外国語力や外国文化に対する理解力を生かした交流推進者にもなり、さらに自国の発展に貢献できるような比較研究者にもなるというふうに、教育目的にも変化が現れてきている。つまり、本人が交流の主役にもなったり、外国の優れた文化などの紹介や吸収を積極的に進める推進者にもなったり、さらには自国の文化との比較研究を通じて政策立案のアドバイザーにもなったり、自国文化を外国へ紹介して相互理解を深める国際者にもなったりするように、役割の拡大と質的変化が求められているのである。

◆交流の架け橋になる人材の育成＝外国語を身につけた二ヶ国語の使用者を育て、自国と外国の意思疎通や交流を仲介するパイプ的な役割を果たさせる。さらに、自国を発展させるために、必要となる外国の情報や優れた文化を紹介し、意見をjする人材を育成する。

☞交流の架け橋と実行推進者になる人材の育成= 自国と外国の意思疎通や交流を仲介する架け橋になるだけでなく、外国と意思疎通や交流を自らも行う実行推進者でもあり、さらに、比較研究などをして文化の相互理解や交流を進める主役的な役割をも果たさせる。つまり、外国語力や外国文化に対する理解を背景に、1) ある部門の担当者になること、2) ある専門分野の専門家や研究者になること、3) 比較研究を通じて、両国文化の良し悪しを熟知する批評家となり、外国の優れた文化を自国に紹介したり、自国の文化を外国に紹介したりして、相互理解を深めることができる人材になること、というのである。

世界がグローバル化し、各国が協力して共存共栄を図らなければならない。中国は発展途上国で、後進国である。このような国際化に取り残されないように、まず先進国の優れた文化や諸制度などを深く理解し、それらを取り入れて自国の遅れた部分を改革しなければならず、また、世界各国との協力関係を作り出すためには、相手国や他国の政治、経済、文化などを知り理解する必要がある。さらには、自国の持続的発展も常に外国の優れた文化の取り入れや角度と視点の変わる良い刺激をもとめることが必要であろう。

このように、中国社会が変化するにしたがって、求める人材には変化が起こり、それに応じて、外国語教育の目的も変わり、教育目標や教育方針も変わってきている。つまり、語学運用能力の育成にさらに力を入れると同時に、外国文化などに対する理解力を高め、さらに異なる角度や視点からの問題提起やアンチテーゼに対する受容意識の育成、比較研究などを通じての問題再認識能力を有する国際感覚を持つ人材を育てなければならないのである。

1.2. 外国語教育目標の変化と重点の移動について

中国における外国語教育の目標として「読む・聞く・話す・書く・訳す」という5技能が掲げられている。そのうち、「読む・聞く・話す・書く」という4技能は言語活動に関するもので、「翻訳・通訳」の技能は架け橋になるものである。つまり、二ヶ国語の使用者であると同時に、両言語の置き換えができる人材の育成を目標とするのである。

◆外国語使用者のための言語能力 = 「聞く」「話す」「読む」「書く」

◆架け橋のための言語能力 = 「訳す = 翻訳と通訳」

初期の外国語教育は、技能の習得や技能レベルの向上に重点が置かれていた。学生に外国文化に対する理解や比較研究能力を求めるのも、よりよく交流の仲介役を果たすためのものであったのである。そのために、基礎となる外国語力を習得した後、総合大学では、主に専門のための外国語教育目標が掲げられて、「読解力・翻訳力」の育成に重点が置かれていたのに対して、外国語大学では、人的交流のための外国語教育目標が明確に打ち出されて、「会話力・通訳力」の育成によく多く力が注がれていた、という傾向があった。

ところが、最近では、外国語教育においては総合大学と外国語大学を区別すべきでない、また、分野別に交流の内容や仕方が多少異なるものの、外国語使用に必要な「聞く」「話す」「読む」「書く」という4技能はすべて習得しなければならないと教育方針が変わることによって、総合大学では外国語専攻の学科が設置されるようになり、総合大学と外国語大学の外国語教育、文科系大学と理科・工科大の外国語教育においては、教育目標が同一化し、カリキュラムも授業設置も非常に似てくるようになった。

一方、現代中国の社会が求めている外国語の分かる人材も性質が大きく変わってきている。外国語力を背景とする人材は、単に交流の架け橋になるのではなく、交流の実行推進者にもなり、比較研究能力を持つある分野の研究者・専門家にもなる、ということである。

☞架け橋と交流実行推進者・比較研究者の役割= 5技能を身につけた言語能力を活用して、交流の架け橋を務めるだけでなく、自らも交流を推進する立案者や実行者になり、さらに専門知識を身につけてある分野の比較研究者になる。

2. 中国における日本語教育の現状と諸問題

中国における日本語教育は、規模が大きく学習者が多い。また、形が多種多様で、教育目標も異なっている。それは、中国においては、日本語の分かる人に対する社会的需要が高く、条件が多様化していること、を表しているものと思われる。次は、中国における日本語教育の現状を紹介し、教育目的と目標を実現するのに妨げとなる問題点を指摘しておきたい。

A) 日本語専攻の教育を行っている大学数と日本語学習者数について

- ①日本語専攻の教育を行っている大学は去年の統計では480校あまりあり、在籍の学習者数は11万もいると言われている（中国日本語教育学と研究学会）。また、総合大学で日本語を第二外国語として勉強している学生や専門学校、語学教育学校で日本語を勉強している学生数は全部で100万人にも上っているという統計もある。
- ②2008年の「日本語能力試験」を受けた受験者数は22万以上という統計が出ている（日本国際交流基金）。受験者数が多いので、2009年

から年に2回試験が行われるようになり、初年度では、トータルでおよそ37万人が試験を受けたという。

- ③中国で社会人の日本語教育に広く使われている『標準日本語』という教科書は、1987年から2007年までの20年間で、700万部以上が売れたという統計があり（人民教育出版社）、その教科書使用と能力試験をリンクさせた解説練習ノートや受験教室などの産業チェーンができていくほどである。

B) 大学の日本語学科に入る学生構成と大学の日本語教育体制について

- ①全国の各省や市に散在する外国語学校（重点外国語学校が20あまりで、そのほかに日本語教育を実施している中学校も多くある）を中心に、中学から日本語を勉強する学生がいる。その学生は大学の日本語学科に入り、日本語の勉強を続ける人が多い。大学に入るまでは、すでに6年間あるいは3年間日本語の勉強歴があった。北京外国語大学日本語学部では、各学年にそれらの学生から構成される「高起点クラス」があり、大学に入ってから日本語を勉強し始める「零起点クラス」と異なった教育カリキュラムに基づいて日本語教育が行われているのである。

- ②大学共通一次試験を受けて各大学の日本語学科に入り、日本語を専攻として4年間勉強する大学生がいる。これらの学生は、英語の試験を受けて入った人が多く、特に名門大学の日本語学習者は英語がよくできるという特徴を持つ。

そのほかに、専門学校や短期大学などで、分野別に日本語を2年間か3年間で勉強する学生もあるが、3年間教育を行う短期大学に限って、日本語専攻の大学生と一緒に中国教育部が実施している「日本語専攻4級試験」を受けることができる。

C) 授業科目と授業時間数

- ①日本語を専攻とする各大学の教育カリキュラムを調べてみると、5技能を身に付けるのに必要な基本的な授業科目はみな設置されていることが分かる。それは、1の所で述べたように、総合大学と外国語大学の外国語教育目標は次第に似てきているからだと考えられる。また、教育現場においては、条件によって各科目に配分される時間数や授業目標、教授法などに多少の差があるものの、特色を明確に打ち出している科目を設置し、効果的に教育を進めている日本語専攻の学科はほとんどない。
- ②教育部の規定によれば、日本語専攻に係る授業時間数が4年間で1650～1700時間前後と決まっており、学校教育における授業時間でおおよそ44%～47%を占めていることになる。その授業時間内で、1)『日本語教育大綱』に定められる教育目標を実現し¹、2)「読む・聞く・話す・書く・訳す」という5技能を身につける、ということである。

1 中国教育部が定めた日本語教育ガイドラインには、4級と6級に応じて、語彙習得数・文法項目・語学運用力に関する具体的な教育数値目標が示されている。例えば、6級の日本語力について次のような教育数値目標が明記されている。

語彙数 = 6級に必要な単語数は6000個である(語彙表には4671個があり、後の1300個は教材編集者や学習者が語彙表の主旨を参照しながら必要に応じて加えていくこととする。) 文法項目(文型)数 = 273項目ある。(教学の実情に従って調整や増補などを行うことができる。)

語学運用力 = ①「聴解力」 = 日本語講座や日本語の放送が聴け、要点をつかむことができる。②「会話力」 = 日本人とコミュニケーションができ、自分の意見や考え、態度などを正しい言葉ではっきりと伝えることができる。③「読解力」 = 大衆向けの新聞や雑誌が読める。また、専門に関する教材や論文などが読め、論点や重要な情報を理解することができる。読む速度は1分間に約110字である。④「文章力」 = 手紙や通知などの日常文章や主題をめぐっての発表レジュメ、専門についての論文などを書くことができる。30分で350字が書け、文章は内容がまとまり、論理的である。⑤「翻訳力」 = 辞書を使いながら日本新聞に掲載された難易度中級の経済や社会、政治、文化などの文章を訳すことができる。訳文は原文の意味を忠実に伝えて言葉使用の間違いが少なく、誤訳は基本的にない。訳す速度は1時間に約900字である。

このような日本語教育目標を実現するには、現在の大学教育体制や条件には、まだ解決すべき問題が多く残っている。特に、最近の新人採用基準を分析すると、政府機関や企業は就職後の再教育に時間や資金を多くかけることをしなくなり、「潜在的素質+現実即戦力」の両方を持つことを強く求めているのである。確かに、大学の日本語教育は社会の変化や企業の需要に何でも応じていかななくてはならないというわけではないが、外国語人材に求める社会的要求も外国語人材が果たすべき役割も変わってきている現在において、日本語教育の問題をしっかりと認識し、よりよく社会的ニーズに答えていかなければならないのであろう。それでは、日本語教育目標を実現するには、どんな問題があるのであろうか。

A) 学校教育における日本語教育目標実現と授業時間数の問題について

大学に入ってから日本語の勉強を始めた日本語専攻の学生に、大学4年間で「読む・聞く・話す・書く・訳す」という5技能を身につけさせることはすでに簡単なことではない。まして、架け橋的な人材ではなく、交流推進実行者や比較研究者を育てるという教育目的を達成するためには、「技能教育」だけではすまされないことになる。一方、日本語教育に使われる授業時間数は半分以下と限られており、独創・創造に関わる「素質教育」や人格育成に関わる「教養教育」の授業が占める割合が高めるにつれて、これからも減ることがあっても増えることがないと言えよう。

B) 学校教育における語学学習環境作りの問題について

中国の大学における日本語教育は、教科書内容を中心に、主に教室で行われているものである。日本語習得では、生活や仕事の実社会から遊離して、架空の環境で語学の運用練習をしなければならず、また、

教室を離れたら、すぐ母国語の言語環境に戻り、勉強内容の応用機会が少ないという欠点がある。さらに、中国の大学における日本語教育は、交流の架け橋や比較研究のために行われているもので、日本語習得に適する語学学習環境と中国語と日本語との置き換え訓練や中日比較研究に適する語学学習・専門研究環境を同時に作り出さなければならぬ。

C) いかに「特色のある日本語教育」を進めるかの問題について

——教育カリキュラム編成・授業科目の設置・教材選択・

新教授法の開発などを中心に——

大学における日本語教育は、目的と目標が同一化し、教育内容や教授法もますます似てきている。総合大学と外国語大学の区別がなく、文系と理・工科系の区別がなく、日本語専攻と第二外国語習得の区別がなくなってきた。そのため、各大学の日本語教育においては、教育カリキュラム編成や授業科目の設置、教材選択、教授法などは基本的に同じで、学生の育成目標も就職先も同じようになってきている。しかし、各学校の教育方針や日本語教育に関する諸条件、学生の興味や将来性が異なるため、同じ目標を目指しながらも、全体計画の不十分さやレベルの高低などが著しく現れてきている。

3. 北京外国語大学日本語学部で進めている

「特色ある日本語学科建設（教育部課題研究）」についての紹介

北京外国語大学は文科系大学で、一流の外国語運用能力と外国に対する深い理解力を背景とし、国際交流と比較研究を特徴とする教育・研究型大学である。中国の国際化に寄与する人材を育てるのが教育目的であり、とりわけ、「読む・聞く・話す・書く・訳す」という5技能を身に

つけた交流の架け橋を務める高級人材を育てるというこれまでの教育目標を堅持すると同時に、国際感覚を持つ交流推進実行者、ある分野における国際的な研究者、比較研究者を養成することを教育目標としている。このような教育目標を実現するために、限られた学校の日本語教育時間をいかに有効に利用し、日本語習得に不利な語学学習環境をいかにカバーして、北京外国語大学の日本語教育の特色を打ち出して中国社会が求めている人材を育てていくのか、これが「特色ある日本語学科建設」の研究課題である。具体的には、4年間の学校日本語教育で教育目標を実現するためには、現在の日本語教育カリキュラムの編成や授業科目の設置、教科書の使用、教授法、教育成果の確認などを検討し、体系化した日本語教育カリキュラム作りを中心に、各授業の役割分担と教育目標、各授業間の相互支援・補完体制作り、日本語運用能力と研究能力、創造能力の育成という教育体制作りを提案しようとするものである。

A) 体系化した日本語教育のカリキュラム作りを中心に、

「読む・聞く・話す・書く・訳す」という5技能を身につけさせるという日本語教育目標は語学運用の総合能力であり、けっして一つの授業で実現できるものではない。それを実現するためには、カリキュラムに設置されている授業が各自の教育目標や段階教育計画を実現すると同時に、他の授業と相互補完関係を作って段階的にまたは全体的に協力して教育を進めなければならない。これまでの日本語教育は、各授業の教育目標や段階教育計画があるが、すべての授業が役割を明確に分担しながら体系化した日本語教育カリキュラムに基づいて協力して進められている協働事業ではない。つまり、個別の授業で完成できても、各授業の間の補完関係を疎かにしている傾向があるのである。そして、それに関係があると思うが、教科書の内容構成や順

順序付け、教授法、練習方法や確認手段に関するものも、個別授業を中心とするものが多く、各授業の間の連携や相互支援という協働体制作りに注意が払われていなかった。

その結果、日本語教育目標の実現において各授業のそれぞれが担うべき役割分担が明確にされていないため、教科書内容の構成も練習方法も段階教育計画の実現も、他の授業と協力して目的達成のために合力的に働くことができない。また、語学運用能力と研究能力の育成という教育目標実現にどのように貢献していくのかという役割分担が明確に定められていないため、結果的には各自の授業内容や成果に対する評価も、客観的な基準を設けて行うことができない。

このように、「特色ある日本語学科建設」という課題研究に対して、体系化したカリキュラム作りを中心に研究を進めている。まず2008年に、その一環として、中国の幾つかの主要大学の日本語学科に対して、カリキュラム編成と各授業の学習年限、使用教科書、教授法などの調査を行い、また現在市販されている主な教科書についても、内容構成や練習方法などの調査を行った。それによると、特定の授業を中心とする教育目標や授業計画、教科書や教授法が一般的によくできているが、日本語教育目標実現を目指しての体系的なカリキュラムが形成されず、各授業の間の連携や相互補完体制が確立されていないのが多いことが分かった。例えば、日本語教育の目標実現に基づいた各授業の役割分担が明確にされておらず、各授業の教育目標や計画は授業別に縦割りに作られていて、授業間の横のつながりが考慮されていない。使用教科書も授業別に編修されているものが多く、各授業の相互支援体制を考慮に入れての内容構成や順序付けではない。各授業が段階的に教育目標実現のための相互支援体制ができていないため、授業効果も成果確認もばらばらに行われていて、語学運用能力と研究能力の育

成という総目標実現の下で、各授業が体系的に進められていないように思われる。

したがって、効果的な日本語教育は、体系化したカリキュラムのもとで、各授業が役割分担を明確にした上で、縦的に教育目標や段階教育目標を立てて進められると同時に、横的に授業間の全体的または段階的な相互支援・補完体制を形成し、協力して進められていかなければならない。その授業間の協力体制は、日本語運用に関する技能的なもの、中日両言語の置き換えに関する技能的なもの、さらに日本の政治・経済・社会・文化に関する研究的なもの、中国と日本との対照・比較に関する研究的なもの、など、様々な授業科目を統合した総合支援・補完的なものでなければならないのであろう。

B) 効果的な日本語教育を中心とした教材・教授法・教育成果確認の改善について

限られた授業時間内で、定められた教育目標を実現するためには、効果的な授業が進められるのが前提である。この研究課題には、いかに効果的な授業が進められるのが具体的な研究内容として取り上げられている。つまり、各授業の縦の教育目標実現と横の相互支援・補完体制作りのために、使用教科書や教授法、練習方法、テスト方法などを総合的に検討するのである。

個別授業についての教科書作りや教授法、練習方法やテスト方法などについては、これまで多く研究されてきており、大きな成果を挙げていると思う。ところが、教育総目標の実現を目指して、体系化した教育カリキュラムのもとで、各授業が協力して授業を進めていくという視点に基づいて、教科書作りや教授法の開発、練習方法の採用、教育効果の確認手段の検討などが必ずしも十分とは言えない。それ

が、効果的な日本語教育に大きな障害になっていると思う。したがって、縦と横の両方から再検討する必要がある。

C) 授業間の支援・補完体制作りに関する研究と日本語教育カリキュラム案の提出

授業間の支援・補完体制作りに関して、日本語学部では、まず各授業を役割分担を明確にした上で、役割別にモジュール化する。そして、モジュール化した授業群を支援・補完体制作りに基づいて教科書や教授法などの角度から検討することにした。

2009年11月に日本語学部が主催する『体系化した日本語教育カリキュラム作りの国際シンポジウム——リーディング・作文授業の独自性と関連性』という国際シンポジウムが行われた。会議では、各地から40名以上の発表者が集まり、閲読と作文の関係を中心に、閲読授業の役割や特徴、作文授業の役割や特徴、そして、作文授業に対する閲読授業の支援や文章理解に対する作文の確認など、について、建設的な意見交換が行われた。閲読授業と作文授業は、独自で教育目標を実現することが難しく、支援・補完体制の下で教育を進めてはじめて、効果的な授業成果が得られるという共通認識を得ることができた。

2010年11月に日本語学部が主催する『体系化した日本語教育カリキュラム作りの国際シンポジウム——精読・ヒヤリング・日本事情授業の独自性と関連性』という国際シンポジウムが行われた。北京外国語大学鐘副学長が北京外大の人材育成目標と教育計画について基調報告を行い、私は日本語学部が進めている「特色ある日本語学科建設」について紹介をした後、80名の発表者が三つの分科会に分かれて、精読授業・ヒヤリング授業・日本事情授業を中心に、授業間の支援・補完体制作りについて意見交換が行われた。そして、段階的な支援・

補完体制を確立するためには、教科書の内容構成や授業の進捗、各授業に適する練習方法の開発などを共同で検討すべきだという共通認識を得ることができた。

2011年には、この課題研究に対し、北京外国語大学日本語学部では、「特色ある日本語教育カリキュラム（草案）」を提出することになっている。そのために、5月に『中国における日本語専攻の大学学部生教育の改革に関する国際シンポジウム——日本語教育の目標実現と体系化した日本語教育カリキュラム作り』を開くことにした。課題研究の締めくくりとして、北京外国語大学の教育目標に基づいて、現在考案している体系化した日本語教育カリキュラムを示したい。授業間の支援・補完体制作りを中心に説明し、さらに、関連研究課題として教科書作りや新教授法の開発などにも触れてみたい。

4. 結びの言葉

中国における外国語教育は中国社会が求めている国際的な人材を育成するためのもので、中国の実情に合った教育カリキュラムを作り、中国人を対象とする効果的な教授法で行わなければならない。そのためには、まず、なぜ外国語を勉強するのか、外国語の習得によって何が得られるのか、という外国語学習の目的をしっかりと認識しておかなければならない。そして、これまでのやり方に対する分析と反省を踏まえた上で、運用能力重視という教育新理念を導入してやる必要があるだろう。

また、中国における外国語教育は、外国語教育に見られる普遍性がある一方で、中国の実情に適するかどうかという問題があり、中国人を対象とする特殊性も存在する。したがって、実情に沿った教育目標を立て、特殊性を生かすような効果的な教育計画や教授法も考案されるべきだと考えられる。

このような新理念に従って、現在の教育体制や日本語教育カリキュラム、それに伴う教育計画や教授法、教科書や練習方法などを検討すれば、課題が山積してやるべきことはたくさんあるように思えてならない。

参考文献

- 『高等院校日語專業基礎階段教学大綱』2001年版 上海外語教育出版社
『高等院校日語專業基礎高年級階段教学大綱』2000年版 上海外語教育出版社
- 于 日平2000.11.「21世紀における中国の日本語教育と改革」『複合型高級人材的培養』中国日語教育研究会編 大連理工大学出版社
- 2007.12.「言語運用能力の育成を目指す言語教育」『日本学研究』2007年上海外国語大学日本学国際シンポジウム論文集
- 2008.7.〈外语运用能力和语言切换能力的培养〉《日语学习与研究》第4期